

第九番 當 麻 奥院の御詠歌（見浄調）

（往生院の御詠歌）

三 宅 勝 作曲



〔詠頭〕 ○ ○ × ○ ○ × ○ ○ × ○ × ○ ○ ×
あ み — — だ — ぶ — と — — 〔斉唱〕 も う す



○ × × ○ ○ × ○ × ○ ○ × ○
ば かり — を — — つと — め に て つと — め に



○ ○ × ○ × × ○ ○ × ○ ○ × ×
て — じょ — う ど — の しょう ご — ん



○ × ○ × ○ ○ × ○ ○ × ⊗ ⊗
みるぞ う れ — — し い — — き —

第九番 大和の国 當麻 奥院^{おくのいん}

阿弥陀仏と 申すばかりを つとめて 浄土の莊嚴^{しょうごん} 見るぞうれしき
(法然上人御作)

當麻寺の本堂は曼陀羅堂^{まんだらどう}と言ひ、中将姫の「當麻曼陀羅」^{たいままだら}が安置されています。この本堂の後方に奥院^{おくのいん}があります。この奥院^{おくのいん}は当初、往生院と呼ばれていました。南北朝時代、応安3年(1370)に知恩院第十二世誓阿上人が勅許を得て、動乱の京都より法然上人御影像^{ほうねんしょうにんぎよう}や法然上人行状絵図^{えず}(勅修御伝)など知恩院に収まっていた貴重な宝物をこのお寺に移されました。當麻寺の奥の院ではなく、知恩院の奥の院として開創されたのです。ある時、誓阿上人が夢で法然上人御影像の額に釘が打たれたと告げられ、驚いて目を覚まし釘を抜いたところ、血が流れ出ました。この靈驗を聞いて世の人は「血垂れの御影」と称して奉ったと記されています。

歌意 『九卷伝』には「三昧発得^{さんまいはつとく}の御歌には」とあり、法然上人も三昧発得の人であられたことを示しています。このことは上人御身の一大事でありますから、「われはただほとけにいつか」と願われたお歌と照らしてみれば、歓喜のお心のほども知ることができましょう。

大意 毎日お念仏を六万遍七万遍とひたすら励んでいますと、おのずから心が静かになり、目のあたりに阿弥陀さまやお浄土のありさまを拝むことができます。身も心も喜びにひたることができますのは、本当にありがたいことです。

ポイント注意

- 半拍休止から立ち上がる声はかるくアクセントをつける。
- 「みるぞ」の「みる」はソフトに、「ぞ」で力強く。